

〔書評〕

宮出禿雄 著

都市近郊農業論

都市近郊の農業とは都市化せられた農業、

換言すれば資本主義化せられた農業を意味する。この種の研究は都市化せられた農村、すなわち郊村の性格を把握する場合必ず取り上げられねばならない。それは農業地理學にとつても農業經濟學にとつても極めて重要な課題たるを失わない。従来とも西水孜郎氏や青鹿四郎氏等がこの方面では唯一の研究者であり、夫々「日本の農業」（本誌三十三卷二號に紹介）や「農業經濟地理學」の著が出されている。本書がこれらの書物と異なる點はといえば、著者が農業經濟的な立場に立つて、おり、農村における集約的な資本主義的經營の浸潤、言葉を変えていえば商的小企業農の成立といつた現象の經濟史的な把握にことに努力し、日本農業の將來性を論ずる具としているのに對し、前二者にあつては、殊に西水博士の場合都市近郊地域を構成する農業景觀の

理解が主目的となつていられるように感じられる。第二は本書がその出版年月において最も新しい關係もあつて、終戦後と戦前の比較が各處に試みられていゝことである。

さて本書は章を分つこと十三。まず前半の六章までは概論的一般的な問題を取扱ひ、七章以下で夫々東京、横濱、大阪、京都、神戸、名古屋といつた我國大都市地域に於ける近郊農業の特質を實際論じている。序説でまず著者は近郊農業の意義を述べ、それは「單に「附近」「近隣」「周邊」という如き一般的な概念でなく、都市を中心として都市を主體的條件とした「地域的」概念である」とのべ、一方「近郊なる概念は距離や行政区で示される地域概念というよりは、寧ろ大都市と何等かの意味關連をもつ地域でなければならぬ」とし、單なるチューネン圏の判定を否定している。そこで具體的な範圍として社會經濟的關係を重んじる著者は都市を中心とすれば「都市生活者の住宅圏」「都市尿尿・塵埃等の農村配給圏」さらに農村の側からすれば「生鮮野菜の都市市場供給圏」「市民の日常食糧の買出し圏(逆に農村行商人の通勤圏)」「農村勞働力の都市工場、事業場通勤圏」等が主要な決定要因となることを述べ、近郊

農業が單に都市周邊の農業と考ふるよりも、むしろ「都市供給農業地域」であると解し、「かくの如き都市近郊に於ける農業の展開は複雑なる農業の資本主義化の一方を指示するもの」であると結んでいる。かゝる觀點から右にあげた各決定要因の夫々について吟味し、市域農家の性格を農家數と經營面積の變遷、兼業關係等から述べている。一町以上農家の減少と五反未満農家の増加、雇勞働兼業者の増加、つまり資本主義化の浸潤は近郊農村をして、いずれも雇勞働への兼業を促進させ、自營農民の半プロレタリアートへの分解を促しつゝあることを述べ、これらは地價の相對の上昇に伴う集約的作目への轉換を促し、例えば芋類、根菜類のごとき粗放作物は茄子、胡瓜、キャベツ、小松菜等のごとき果菜葉菜の集約作物へ交替しつゝある現象を説明している。一方に離村向郊の現象を論じ具體的な問題をさらに「大都市の尿尿處理と近郊農業」なる節において強調している。著者はウイットフォオゲルの農業生産における水と尿尿は、アジア的全農業過程一般の中心的な、寧ろ最中心の生産力を形成する」の文句を引用して、この尿尿を通じて都市と農村がいかにか結ばれたかを見ようとするのであ

る。この場合輸送機關や尿尿配給距離の變化、肥料としての經濟的負擔等の問題を東京都に例をあげ、戦前その配給密度は江戸川沿岸に最も高く、その配給圏は東京驛より凡そ十二里の地内に最も多く配給されていたものが、戦中より戦後にかけての自動車輸送力の減退はこの配給圏をぐつと引締め、都當局の直送範圍即ち七里の圏内に壓縮されたとのべている。一方肥料としての尿尿價格はその距離と都市の大きさに規定されることを述べ一人一日の勞力で搬出し得る量は、その勞賃との比較において自由市場における肥効價より安い場合のみ成立されるとなし、通常人口二十萬、半徑二里以下の農家迄の距離が三里半の都市で市では、都市の側に別段の施設をしなくても、近郊農民が自己の車をもつて積極的に汲みとりに来て經濟的に引合うが、それ以上になると賃勞働に出て自由市場でヤミの肥料を購入した方が有利であるといった結論を用いている。その他零細經營からくる農業所得の低きにもかゝらず戦後とくに供出と租稅負擔に苦しむ農家の姿等がえがかれている。特論ともいへば各地域の近郊農業については、たとえ東京都についていへば明治以降の蔬菜栽培の種別反別月別の變化、

第一次大戦後の温室フレームによる促成栽培の發達、都心よりの距離と地代並びに農業經營の變化等が、大阪についていへば主要蔬菜類の需要と府下の月別生産量を比較、生産出荷と消費との關係を各蔬菜について説明し、玉葱のみは市の需要を滿し、尙その二倍の出荷能力をもつこと、他の場合はしからざること、他の場合はしからざること等を述べ、一般に大阪の郊村は耕地の細分化が東京よりも進行し勞働集約的兼業農家がとくに多いことを注意している。京都の場合これに反して專業農家の戸數多く、自小作農耕作面積も平均一町歩を超えていること、またこゝでは市需要量の七一八割が府下で供給されていること等のべられてゐる。

本書は表題にもある如く近郊農業論であつて、十三から成る各章は、著者がかつて「都市問題」その他各種の雜誌に發表されたものを後に結び合せ一冊の書としたものゝように見受けられる。その點で各章毎に着實な實證的研究や豊富な資料があげられ、これだけで既に我々の研究を益するものが少くない。只

欲をいへばその爲に、各章毎の連關や、概論と特論との關係がなお一層有機的にとけ合はず、その研究の比重も特論の方がやゝ弱い様

に感じられるのが淋しい。また特論中各地域の近郊農村を論じたら、全體として見たる各都市の比較や特質が少く、結論で「大都市の周辺には衛星都市が存在し、甲都市の周辺の近郊農業は同時に乙丙都市の影響下にある。云々」と述べ乍ら、本論に於ける研究は單なる一都市を抽象した論議のみであり、この點

われわれ地域性の影響を重視する地理學徒の讀後感はなおあきたらぬものが少くない。同様に近郊農村の地域を問題にし乍ら、具體的な地理的地域が少しも叙述されていないことは、著者の立場が農業經濟にありとはいへば、この種接觸領域を研究する學者が、日本の場合、今日なお自己の立場のみを墨守し、他の立場の教養を缺くといつた一例を示す様に思える。こういう意味において反對側におかれた地理學徒にとつて本書は必讀の良著であると考へる。

(A5版、二五四頁、昭和二五年)

實業之日本社發行 定價二八〇圓)

—— 藤岡謙二郎

松田智雄

イギリス資本と東洋